



本間良二の 第5回 One Size Fits All

草の伸びがすごい。

Text & Illustration: Ryoji Homma
Photograph: Shio
Design: Kosuke Shono



シャツは1907年よりアメリカの法務執行機関や郵便や消防などのユニフォーム・アパレルを手がけるELBECO社のヴァンテージ・オフィサー・シャツ。テキスタイルがポプリンなので破いてしまいがちで、じつはちょっと怖い。パンツはBROWN by 2-tacsのもので、テキスタイルはアイリッシュリネンなのでこちらは丈夫。リネンのパンツを穿きながら細仕事なんてアウグスト・ザンダーの写真みたいでちょっとかっこいいけれど、これも正直に言うとあまり汚したくない。自分がしたい格好と実用のハザマで揺れるこの感情の理解者はいない。ハットは奥さんのものを持備。ブーツは最近のサイドゴア・ブーツ好きが高じて自分でデザインをして日本の靴工場に製作していただいたサンプル。履き心地や耐久性、シワの入り方などをテストしているところ。



1. 雨が降ったときの作業は相変わらず網戸の張り替え。この作業も馴れてきて張り具合が上手くなってきた。2. 久しぶりにサインを描いた。最近は何んでもかんでも写真を撮ってSNSにアップしてしまう人が多くて困る。自分の家をアップするのはいいけれど、人の家を許可なく勝手にアップするのは、どうしたものかな...と思う。新しい技術によって楽しいソフトが開発されることは悪いことではないけれど、そのたびに今まで起こり得なかった弊害が起きる。そういうときはお互いの倫理観を徹底的に議論すればいいのだけれど、その結論が出る頃には、また新しいソフトが出てくる。このループが正直言って面倒臭いんだよなあ。3. 家の近くでワラビがニョキニョキ出ていたので採って、醤油ベースの鶏肉と一緒に炊き込みごはん作った。そこに木の芽をのせて食べたらもう最高。春の香りが口いっぱい広がります。4. 種を植えたポットから豆類（つるありエンドウ、枝豆）が最初に芽を出して、その次にラディッシュ、ほうれん草、アスパラガス、レタスの順番に出てきた。トマト、ピーマン、カボチャはなかなか出てこないで、落花生はまったく芽が出る気配がない。そんなことを隣の畑の先輩に話したら「僕でなくていいんだよ。苗植えるのが一ヶ月遅れたら、収穫が一ヶ月遅れるだけだからサア」と言われた。その通りだ。5. 樺の木の剪定はエンジン式のヘッジトリマーで整えてから、枝をハサミで剪定をしている。景色もスッキリして風通しも良くなり、伐った枝や葉も利用価値がある。断捨離をしたことはないけれど、作業後の満足感はきっとそれに近いのかも。

とくに雨が降ったあとには、ニョキニョキとなかなかのスピードで伸びている。

新緑を纏った樹木の枝たちは春の光に照らされて、輝きながらフワリフワリと風に靡いている。「キレイだなあ...」と、つい見とれてしまう。「せつかくだからのんびりやる...」

そう自分に声をかけて、ゆっくりと草刈りや剪定の準備にとりかかる。

冬の間は枯れているのか判別ができなかった枝が、この時期は一目瞭然なので、樹木の剪定には精がでる。

絡み合った枝を掻き分け、伸ばしたい枝を残して、必要のない枝は大胆に伐る。

良い方向へ伸びようとしている小さな萌芽を見逃さないで残しつつ、バッサリ、残しつつ、バッサリと、何年後かの樹形をイメージして伐る。

この集中している時間がたまらなく好き。思えばサインペインティングに熱中しているときだって、ベイエリアで古着やガラクタをホジクっているときも同じように集中していた。

やっていることは違えど、結局僕はこの集中している時間が大好きなのです。

下草の草刈りもなかなか骨の折れる作業ではあるけれど、伐った草をコンポスト・ストレイジに移動しておけば腐葉土となる。

完熟の土になる前でもフオークなどでひっくり返してみると、すでに多くのミミズが活発に動いている。

その半熟の腐葉土を畑の畝にミミズごと乗せてしまえば、わざわざビニール製のマルチシートを買わなくても土の保湿にもなり、ミミズやヤスデの住処となって畑の土を賑やかにしてくれる。

伐った樹木の枝は薪になるし葉の部分を乾燥させれば、良質の焚付けになる。

山の整備ではゴミになるものが一つもなく、そのサイクルを想像しながらニヤニヤしながら草刈りや剪定をしている。

人間というのは欲深いもので、このように副産物の収穫を想像しながら作業を進めると体も幾分か楽になるようです。

最近はまだ自然農やパーマカルチャー関連などのいろいろな本を読んでいるのだが、その著者によって細かなディテールに差異があつて、場合によっては真逆な意見もあるので困惑をしていた。

しかし、よくよく考えてみると風土も違えば、標高差もあるような自然に対して全員が同一な意見の筈はない。

だから、自分が気に入ったやり方を実際に試して観察をして、その方法が合わなければやめればいいし、適応しているようであつたら、そのまま推し進めればいと思つている。

きつと僕の目には映らないような、ミクロの世界で起こっている様々な事象が深く絡み合い、自然の時間が結果を作っていくのだから、化学肥料や農薬を使わない人間ができることなんて高が知れている。

その人間、ひとりひとりが持つ自然というものの解釈にも大きな差があるので、これだけ多くの書籍が出版されていて、多様な意見が飛び交っているのだろう。

だから、まずは僕自身が自然というものの解釈をしっかりと定義しないと、なにも前には進まないということが、多くの本を読んでわかったことだ。

そして僕自身が考える「自然の定義」を、この土地にあった方法で実践してはじめて、「僕という人間」と「この土地」との「自然」な接し方というものが見えてくるのではないだろうか。

どちらにしても、その結果はすぐにわかるようなものでもないで、自然に流れている時間にまかせておくしかない。

答えは風に吹かれている、ということなのです。

本間良二「スタイリスト」2-tacs共著『The Front Shop』ナエーナ。90年代から始めた活動は多岐にわたる。